

よりよい人間関係の構築に向けた自他の理解を進める授業づくりに関する研究 －自分の気持ちとの付き合い方に関する授業と 多様性を認め合うことに関する授業の開発を通して－

やまぐち総合教育支援センター子どもと親のサポートセンター
長期研修教員 山口市立大歳小学校 教諭 渡邊 克敏

本調査研究は3年間の計画で進め、最終年度となる今年度は、子どもと親のサポートセンターと長期研修教員の合同研究として授業実践に取り組んだ。ここでは、山口市立大歳小学校で行ってきた実践について報告をする。

I 調査研究の概要

1 目的

自己理解と他者理解を深め、互いを尊重し合う人間関係を構築することは、児童が安心・安全に学校生活を送ることにつながっていく。そこで、「自分の気持ちとの付き合い方に関する授業」と「多様性を認め合うことに関する授業」を開発することで、よりよい人間関係を構築し児童が楽しく通えるような学校づくりを進める。（図1）

2 計画

本調査研究は、令和2年度から4年度までの3年間で実施することとした。（図2）

3 開発した授業とそのねらい

(1) 「自分の気持ちとの付き合い方に関する授業」

（ねらい）

人は誰もが大小様々なストレスを抱えていることに気付き、ストレスへの適切な対処法を考えることで、自分に合った方法を見付け、それを自らの生活の中で実践しようとする態度を育む。

(2) 「多様性を認め合うことに関する授業」

（ねらい）

一人ひとりの特性や困りに違いがあることを知り、自分と異なる他者の困りを理解しようとしたり、関わり方について考えたりすることで、誰もが支え合いながらよりよく生きようとする態度を育む。

(3) 「振り返りの授業」

（ねらい）

「自分の気持ちとの付き合い方に関する授業」や「多様性を認め合うことに関する授業」を

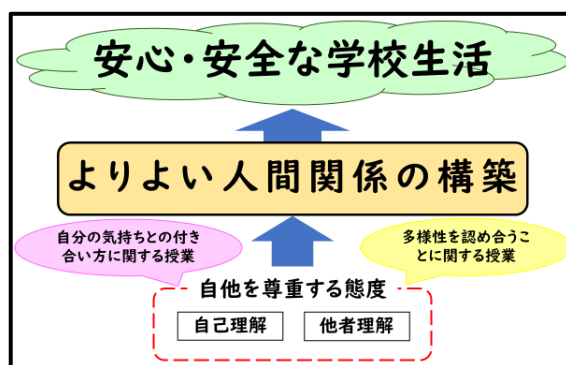


図1 調査研究の概要図

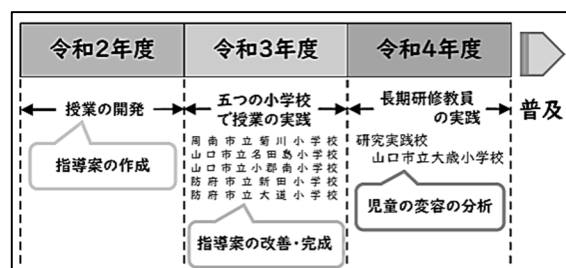


図2 調査研究スケジュール

振り返り、誰もが楽しく過ごすために大切なことについて考えたり、話し合ったりすることを通して、自分ができることを考えて、自分に合った行動目標を立てて実践しようとする意欲を高める。

II 合同研究の取組（山口市立大歳小学校での実践）

調査研究において開発した学級活動の授業を山口市立大歳小学校で実践し、児童の変容の分析を行った。

1 目的

開発した授業を学級活動の年間指導計画に位置付けて実施し、児童のよりよい人間関係の構築をめざす。

2 仮説

「自分の気持ちとの付き合い方に関する授業」（以下、「自分の気持ちの授業」という）と「多様性を認め合うことに関する授業」（以下、「多様性の授業」という）を年間指導計画に位置付けて行うことで、自己理解、他者理解が進み、よりよい人間関係が構築される。

3 内容

(1) 対象

高学年児童 250 名（5 年生：4 学級 130 名
6 年生：4 学級 120 名）

(2) 指導計画

それぞれの授業の内容と、児童の人間関係及び学校行事等を考慮し、図 3 のように「多様性の授業」を 1 学期に 2 時間、「自分の気持ちの授業」を 2 学期に 2 時間実施し、自他の理解を進めていく。最後に「振り返りの授業」を行い、自他を尊重する態度を養うとともに、よりよい人間関係を築くために大切なことについて気付かせる。

(3) 授業の概要

高学年児童に対し、「多様性の授業」を 2 時間と「自分の気持ちの授業」を 2 時間、「振り返りの授業」を 1 時間実施した。（表 1）

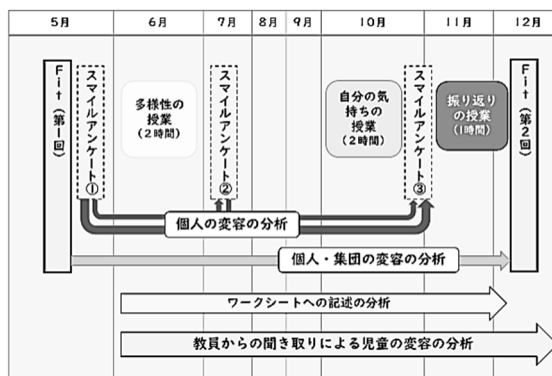


図 3 指導計画及び変容を見取る計画

表 1 授業の概要

	第 5 学年	第 6 学年
1 学期	「多様性を認め合うことに関する授業」	
	(第 1 時) 様々な特性や困りのある子どもたちがいることに気づき、その子どもたちの気持ちや願いを考えることを通して、見ようとしなければ見えないことがあることに気付くことができる。 (第 2 時) 様々な特性や困りのある子どもがそれぞれに困っている場面で、何かできることはないか、何ができるかを考えることができる。	
2 学期	「自分の気持ちとの付き合い方に関する授業」	
	(第 1 時) 不安、悩み、怒り、緊張などへの対処法について話し合うことを通して、様々な方法があることを知り、自分に合った実現可能な方法で対処することへの理解と意欲を高めることができる。 (第 2 時) 提示された場面において、様々な考え方があることに気づき、どのような考え方をすれば気持ちを楽にすることができるのかを考える活動を通して、自分を振り返る、他の原因を考える、受け止め方を見直すなどの不安、悩み、怒り、緊張等をためない考え方のよさに気付くことができる。	(第 1 時) 気持ちを言葉で表現することや、嫌な気持ちになったときの対処法について学ぶことを通して、クラス内で共有した「気持ちをすっきりさせる様々な方法」を日常生活で試そうとする態度を身に付けることができる。 (第 2 時) 心が苦しくなったときの相談の切り出し方、相談の聞き方、大人へのつなぎ方を学ぶことを通して、援助希求的態度を育成することができる。
	振り返りの授業	
	誰もが楽しく過ごすために大切なことを考えたり、これまでの学習や自分のめあて(行動目標)を振り返ったりする活動を通して、よりよい人間関係を構築するための自分に合ったこれからのめあてを設定することができる。	

(4) 見取りの方法

ア 児童対象のアンケート

児童の変容を見取るため、年間指導計画に位置付けて、2種類のアンケート(Fit(生活アンケート))を2回、スマイルアンケートを3回)を図3のように行った。

Fit(生活アンケート)は、学校生活等への適応感を測定するために、山口県教育委員会と山口大学が共同して作成したアンケートである。スマイルアンケートは、開発した授業による児童の変容を見取ることを目的として、子どもと親のサポートセンターと長期研修教員が協働して作成したアンケートである。なお、授業後に実施したFit(生活アンケート)とスマイルアンケートは、授業後の児童の変容の効果を見取るため、学習の直後ではなく、授業から一定期間空けて実施した。

イ 教員からの聞き取り

担任及び養護教諭等に、授業の実施前後の児童の姿について聞き取りを行った。

ウ ワークシートへの記述

各授業で使用したワークシートへの児童の記述内容を収集した。

4 結果

(1) アンケート

スマイルアンケートは、授業前後の個人の変容を分析するために実施し、自己理解と他者理解の認識と行動について授業前後で比較した。(図4)

他者理解について、考えることに関する質問では、授業前から肯定的な回答をした児童の割合が9割以上と高く、授業後もそれを維持していた。行動に関する質問では、肯定的な回答をした児童の割合は授業前後ともに6割程度だった。自己理解について、考えることに関する質問では授業前から肯定的な回答をした児童の割合が9割程度と高く、授業後もそれを維持していた。行動に関する質問では、肯定的な回答をした児童の割合は授業前が5割程度で、授業後は6割程度になっており1割近く増加した。この増加は他の項目と比べると変化が大きかった。

Fit(生活アンケート)は、主に集団の変容について分析するために実施した。

(2) 教員からの聞き取り

高学年児童と関わりがある学級担任や支援学級担任を中心に、日頃の児童の様子について聞き取った。主な行動の変容は次の通りである。

- ・困っている友達に気付いて話しかけたり、教えたりする。
- ・支援学級の友達との関わりの中で相手の話を最後まで聞いたり、見守ったりする。
- ・怒りの感情のままに物に当たっていた児童が、深呼吸して気持ちを落ち着かせている。
- ・日頃の学校生活の中で気持ちを楽にする対処法を試すようになった。

(3) ワークシートへの記述

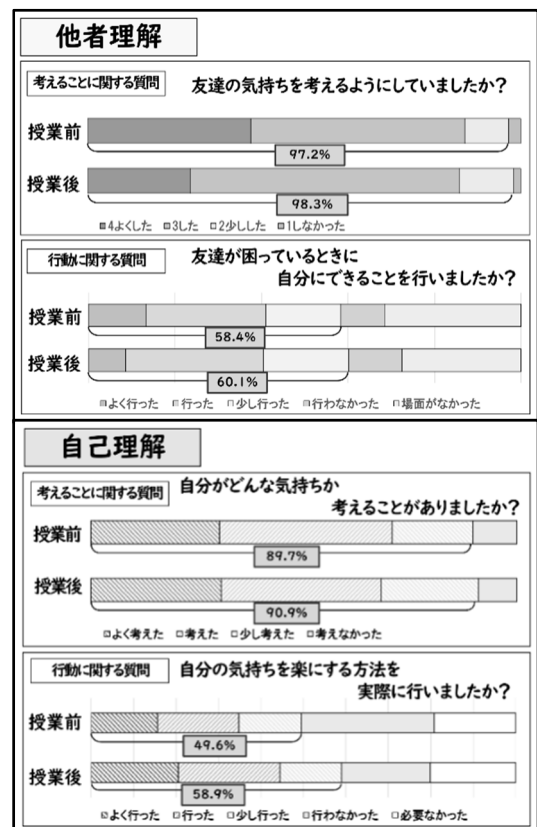


図4 スマイルアンケートの結果

「振り返りの授業」のワークシートへの記述では(図5)、自分の取組を振り返り、友達の気持ちを考えて行動するようにしたり、自分の気持ちを大切に心臓を保とうとしたりしたなどの記述が見られた。

また、振り返りによって、児童自身が自己理解や他者理解を進めたことによる自分の成長や変容に気付いた記述も多く見られた。

この学習をしてから、前より友達の気持ちを考えるようになった。
前よりもいろいろな人と話すようになった。
今後のあてをた、せいできるよにがんばりたい。
気持ちを軽くする方法をこれからも続けたいと思います。
一学期のころ、学校に行きたくないの心でネガティブ思考だった
私が2学期になり折り返いをつけて自分の気持ちを尊重することが
できるよになつた。学活で、少しは変わったのかな?と思いま
す。これからも、自分の気持ちを尊重することを続けたいと思
います。

図5 児童によるワークシートへの記述

5 考察

(1) 児童の行動の変容について

今回の授業実践では、児童は授業で学び考えたことを行動に移すことができるようになったと考える。「多様性の授業」の実践では、見ようとしないと見えないものに気付くという学習を通して、今まで気付かなかった他者の困りに気付こうとする姿勢や、他者の困りに対して、自分ができることを行うなどの児童の行動の変化が見られた。「自分の気持ちの授業」の実践では、自分の気持ちを意識したり楽にしたりする対処法を学ぶことにより、自分の気持ちに関心をもつようになったり、実際に自分の気持ちを軽くする対処法を行ったりするなどの新たな行動が見られた。「振り返りの授業」の実践では、自分が立てた行動目標に対する自身の取組を振り返ることによって、学習による自分自身の変容を認識した上で、実現可能な行動目標を設定した。こうした振り返りの指導を取り入れることは、これまでの学習内容を更に定着させ、目標達成のために児童が行動を継続させていくことにつながると考える。

(2) 自己理解に関する学習をすることの必要性について

今回の授業実践を通して、他者理解に関する学習とともに、自己理解に関する学習を行うことの必要性を示すことができたと考える。自己理解については、アンケートの結果から、授業前後ともに9割程度の児童が自分の気持ちを意識していた。そして、自分の気持ちを楽にする方法を実際に行ったかという行動に関する質問に対する肯定的な回答の割合は、授業前後で1割程度増加しており、これは学習により児童の行動が変化した結果であるといえる。また、自己理解と他者理解を比較すると、意識に関しては授業前後ともに他者理解の方が自己理解よりも高い割合を示した。一方、行動に関しては、肯定的な回答をした児童の割合は、自己理解の方が他者理解と比べて授業後増加していた。この結果の背景として、高学年児童がこれまで他者理解に関する学習は積み重ねてきているが、自己理解に関する学習機会は少なかったということが考えられる。そのことから、「自分の気持ちの授業」は、児童に新たな視点に気付かせ、自己理解を進めるよい機会になったと考えている。

以上のことから、合同研究を通して、「多様性の授業」と「自分の気持ちの授業」、「振り返りの授業」を児童の実態に即し年間指導計画に位置付けて行うことは、児童が自己理解、他者理解を進めることに一定の成果をもたらすといえ、今後のよりよい人間関係の構築につながると考えている。

【参考文献】

- ・ 文部科学省、『小学校指導要領』, 東洋館出版社, 2018
- ・ 大対香奈子 大竹恵子 松見淳子,『学校適応アセスメントのための三水準モデル構築の試み』教育心理学研究, 2007
- ・ 山口県教育委員会,『Fit(生活アンケート)の使い方について』, 2012